

リー・ハントの詩論と「聖アグネス祭前夜」批評

—『想像力と空想』を中心に—

金澤良子

序

リー・ハントがジョン・キーツの詩作に及ぼした影響については、すでに盛んに議論されている。だが、その議論の対象はもっぱら、コックニー詩派特有の語彙や、分不相応とされる古代ギリシアへの傾倒等が中心であり、これらは保守系の雑誌がコックニー詩派を批判する際には真っ先にその矛先が向かうものであった。また批評家は、キーツの作品に表れるハントの影響を論じる際、キーツの語彙や感傷性に終始することが多い。キーツが、クラーク学院時代より愛読していた『エグザミネー』(*Examiner*)の編集者であるハントを敬愛し、その思想に惹かれていたのは確かである。最初の詩集である *Poems* (1817) には、ハントの *Hampstead Poems* を彷彿とさせる美しい自然の描写に溢れた詩が数多くみられる。だが、後に両者の間にはっきりとした乖離が生じたのもまた事実である。書簡の中で 'Hunt keeps on in his old way — I am completely tired of it all. He has lately publish'd a Pocket Book called the literary Pocket Book⁽¹⁾ — full of the most sickening stuff you can imagine' (L ii 7) と明らかにハントを非難する一節がある。ハントの *Literary Pocket Book* を真っ向から非難するこの一節が書かれたのは1818年12月後半から翌1月4日頃である。ここで注目したいのは冒頭の「ハントは己の古いやり方を続けている。私はすっかり飽き飽きしている」という一節である。かつては深い共感を覚えた管の師の「やり方」を古いもの、退屈なものと言し、ハントによって選ばれた作品群を「最もうんざりするようなもの」と一蹴している。キーツはこの時期、「ハイペリオン」('Hyperion') 完成のため筆を執るも、はかどらず、この書簡の後の1月18日にはこれまで彼が主題としていた古典神話世界とは全く系統の異なる、中世を舞台にした物語詩「聖アグネス祭前夜」('The Eve of St. Agnes') を手掛けるのである。

本稿では、まず、ハントが *Imagination and Fancy: or, Selections from the English Poets* (以下、『想像力と空想』とする) の中で示した詩論を取り上げ、ハント自身の詩に対する考えを追っていきながら、詩そのものに対するキーツとハント、両者の見解の違いを明らかにしていきたい。次に、『想像力と空想』でハントが展開させる「聖アグネス祭前夜」批評を読み解きながら、ハントの考える「最も詩的な」詩とはいったいどのようなものであるのかを探りたい。その上で、キーツの詩に対する考えはどの点でハントとは異なるのかを検証し、キーツにとって、どのような詩を書くことが彼の目的であったのかも明らかにしたい。

‘What is Poetry?’

『想像力と空想』はハントが60歳を迎えた1844年に出版された。まず、この本の構成について確認をしたい。冒頭には、‘What is Poetry?’と題した、詩に関する小論が置かれ、次に‘Selections from Spenser, with Critical Notice’という章が続き、以下同様にマーロー、シェイクスピア、ジョンソン、ポーモンとフェレッチャー、ミルトン、コールリッジ、シェリーという具合に、英国の詩人が各章で取り上げられ、‘Selections from ... with Critical Notice’という題の下、5から24ほどの詩もしくはテーマを題材に、詩の一部が引用され、各詩行に対するハントの解釈が述べられている。ロバート・ブラウニング（Robert Browning）の妻で14代桂冠詩人候補でもあったエリザベス・バネット・ブラウニング（Elizabeth Barrett Browning）は‘It will be a companion to me for the rest of my life’⁽²⁾と述べていた。1844年に出版されると、二年後の1846年には再版が出ている事実からも、ハントにとってこの出版は成功であったと思われる。アンソニー・ホールデン（Anthony Holden）によれば、この成功に気をよくしたハントは‘Action and Passion’, ‘Contemplation’, ‘Wit and Humour’, ‘Song’をテーマとした同様のアンソロジーの出版を計画していたようである⁽³⁾。『想像力と空想』に関しては、これまで、あまり研究の対象とはなっておらず、ニコラス・ロウ（Nicholas Roe）は‘his choice selections from various authors open the way for *A Jar of Honey from Hybra* (1848), *A Book for a Corner and Readings for Railways* (1849); an article on ‘Pleasant Recollections Connected with Various Parts of the Metropolis’ anticipates both *The Town* (1848) and his articles for the *Atlas* magazine (1847)’⁽⁴⁾と言及しているだけである。ハントは序文の中でこの本を執筆した理由について次のように述べている。

This book is intended for all lovers of poetry and the Sister arts, but more especially for those of the most poetical sort, and most especially for the youngest and the oldest: for as the former may incline to it for information’s sake, the latter will perhaps not refuse it their good-will for the sake of old favourites. The Editor has often wished for such a book himself; and as nobody will make it for him, he has made it for others.⁽⁵⁾

ハントは『想像力と空想』の中で、次のように詩を定義する。

Poetry ... is the utterance of a passion for truth, beauty, and power, embodying and illustrating its conceptions by Hunt, and modulating its language on the principle of variety in uniformity. Its means are whatever the universe contains; and its ends, pleasure and exaltation. Poetry stands between nature and convention, keeping alive among us the enjoyment of the external and the spiritual world.⁽⁶⁾

詩は真、美、そして力を求める情熱の発露であり、想像力と空想によってその概念を具現化し、明示しながら、統一の中の多様性の原理に基づきその言葉を調整していく。その方法は、世界が包含するあらゆるものであり、その目的は喜びと高揚である。詩は自然と慣習の間に位置し、われわれに、外的世界および精神的世界を生き生きと享受させる。⁽⁷⁾

詩の目的を喜びと高揚であるという箇所はハントの詩論の中核を成す重要な考えである。そして、この後で真理、美、力についての詩との関係性が説明される。ところで、キーツにとっても重要なテーマの一つとして真と美の問題があるが、前者の真と詩の関連について、ハントは以下のように述べている。

Poetry is a passion, because it seeks the deepest impressions; and because it must undergo, in order to convey them. It is a passion for truth, because without truth the impression would be false or defective. It is a passion for beauty, because its office is to exalt and refine by means of pleasure, and because beauty is nothing but the loveliest form of pleasure.⁽⁸⁾

詩とは情熱である、なぜなら詩は最も深い印象を求めるからであり、それ[印象]を伝えるために引き受けねばならないからだ。詩は真を求める情熱である、なぜなら真がなければその印象は誤った、あるいは不完全なものになるからだ。詩とは美を求める情熱である、なぜなら詩の使命とは喜びという手段によって高揚させ、洗練させることであり、美は喜びの最も優美な姿に他ならないからだ。

ハントにとって、真とは、詩が伝える印象を正確かつ完全なものにするものである。この小論の中で、ハントは‘truth’という言葉を繰り返し用いている。ハントにとって真とは、詩とは何かを語る上で必要不可欠なものである。ここでは特に重要と思われる三箇所を引用したい。ハントは「詩人がすべてのものに先だって養わなければならないものは愛と真であり、詩人が毒のように、避けなければならないのは、無常なものと同様のものである（‘What the poet has to cultivate above all things is love and truth; — what he has to avoid, like poison, is the fleeting and the false’）」(Hunt 59)と述べる。ここで、真は無常と虚偽の対極に存在し、永遠性を保持したものと位置づけている。次に、「どの種類の真も、いずれの種類であれ美の中に芽吹くものであれば、あるいは、詩的才能によって明示され印象付けられることが可能であるならば、それは詩人のものとなる。いや、単純極まりない真はしばしばあまりに美しく、それ自体印象的であるので、真それだけで存在させておくことが、詩人の才能を最もよく証明することになる。（‘Truth of every kind belongs to him [the poet], provided it can bud into any kind of beauty, or is capable of being illustrated and impressed by the poetic faculty. Nay, the simplest truth is often so beautiful and impressive of itself, that one of the greatest proofs of his genius consists in his leaving it to stand alone’）」(Hunt 5)としているが、先の引用と併せて考えると、

詩人はいずれの種類であっても、ある真を詩の中で美として表現することが出来れば、その真を永遠のものとして獲得することが可能であるということだろう。このように、ハントにとって真理と美とは分かちがたいものである。さらに、詩と真と美の関連性について次のようにも述べている。

Wherever truth and beauty, whatever their amount, can be worthily shaped into verse, and answer to some demand for it in our hearts, there poetry is to be found ; whether in productions grand and beautiful as some great event, or some mighty, leafy solitude, or no bigger and more pretending than a sweet face or a bunch of violets ; whether in Homer's epic or Gray's *Elegy*, in the enchanted gardens of Ariosto and Spenser, or the very pot-herbs of the *Schoolmistress* of Shenstone, the balms of the simplicity of a cottage. (Hunt 58)

真と美が、それがどれほどのものであれ、立派に詩行の形となり得、われわれの心中にある詩行に対する何らかの要求に答えるところであればどこでも、詩は見出されることになる。重要な出来事のような偉大で美しい被造物、あるいは巨大な葉の茂ったところでの孤独や、可愛らしい顔やスマイルの花束ほどの些細で控えめなもののうちであれ、ホメロスの叙事詩やグレイの『墓畔哀歌』、アリオストとスペンサーの魅力的な庭にも、シェンストーン『女性教師』のまさにあの香味野菜にも、小屋の素朴な香草にも詩は見出される。

ここで、ハントは真と美を並置させているが、改めて冒頭でなされた詩の定義、すなわち「詩は美を求める情熱である、なぜなら、詩の務めとは喜びという手段により、高揚し、洗練させることだからであり、また美は喜びの最もすぐれた姿にほかならないからだ」という記述と併せて考えると、真と美は、喜びで、高揚させ、洗練させるという詩の目的が成就されるならば、その程度は問題にならないのである。

ハントは *Feeling* と *Thought* という二つもまた、詩人に必要なものとして、次のように論じている。

Thought by itself makes no poet at all; for the mere conclusions of understanding can at best be only so many intellectual matters of fact. Feeling, even destitute of conscious thought, stands a far better poetical chance; feeling being a sort of thought without the process of thinking, — a grasper of the truth without seeing it. And what is very remarkable, feeling seldom makes the blunders that thought does. (Hunt 55)

思考それ自体では、詩人は生まれえない。というのも、理解によって導かれる結果というものはせいぜい多くの知性上の現実的事柄になりうるに過ぎない。感じるの方が、もし多少意識的思考が足りない場合でも、はるかに優れた詩になる可能性がある。ここでいう、感じるとは、思索する過程を踏まないある種の思考の状態のことである。すなわち、それは見ることなしに、真理をつかむことである。そして、非常に注目すべきなのは、感じることは思考がやるような大失敗

はめったにしないことだ。

また、‘we have so many new poets coming forward, it may be as well to give a general warning against that tendency to an accumulation and ostentation of thoughts’ (Hunt 42) とあるように、詩人にとって、過剰な思考の誇示は不必要であることが仄めかされている。また、「思案する過程を踏まないある種の思考の状態のことである。すなわち、それは見ることなしに、真理をつかむこと」という箇所は『エンディミオン』(Endymion)の第一巻のパーンの讃歌で示されるパーンの存在原理そのものと密接に関係している。書簡の中でも、論理的思考よりも感覚を重んじるキーツの思想と一致している。ハントは、『想像力と空想』の随所において、詩とは何か、という問いに対する答えを様々な表現を用いて提示している。彼にとって、詩は真理をつかむことであり、その真理は詩の中で美という衣をまとって永遠性を獲得し、読者に喜びを与えるものでなければならない。同著の第二章以降で取り上げる様々な詩作品は、彼の主張の妥当性を補完する材料となっていく。

ハントによる ‘The Eve of St. Agnes’ 評

偉大なる詩行に満ちた『想像力と空想』の最後を飾るのが、ハントの愛弟子でもあるキーツの章である。ハントがこの作品の中で評しているキーツの詩の中で、正式なタイトルが挙げられているのは、「聖アグネス祭前夜」と「ナイチンゲールによせる」、「チャップマン訳のホメロスを読んで」だけである。この三篇に関しては、詩行のすべてが引用されているが、それ以外の詩はすべて、詩の一部のみが引用され、ハントが便宜上つけたタイトルが冠されている。これらの詩の引用にはコメントはなく、おそらくハントが気に入った箇所を羅列しているに過ぎない。実際にコメントがなされるのは、先に確認した三篇の詩である。中でも、「聖アグネス祭前夜」のコメントの分量は他の二篇に比べても多く、これはもちろんその詩行自体の分量の違いともいえるが、それだけではないだろう。

そもそも、この『想像力と空想』をハントが執筆した理由は序文の中で述べられているが、ここで、ハントは「詩と姉妹芸術の愛好者、とりわけ最も詩的な類のものを愛好する人」に向けて書いたのだと明示していた。先の三篇の詩のうち、「聖アグネス祭前夜」に関しては、詩行をすべて引用し、多くのコメントをつけていることから、キーツの作品の中で「聖アグネス祭前夜」を「最も詩的な」(‘the most poetical’) 作品として彼が評価していた可能性が大いにある。1820年詩集出版後に、ハントは『インディケーター』(*The Indicator* 2 and 9 Aug, 1820)の中でこの物語詩を称賛し、1835年1月21日の『ロンドン・ジャーナル』(*The London Journal* 21 Jan, 1835)において、この作品を掲載していることから、この詩をハントが高く評価していたことがうかがえる。

まず、ハントはキーツを取り上げた章で、「キーツは生まれながら最も詩的な種類の詩人だ(‘Keats was born a poet of the most poetical kind’)」(Hunt 283)と、冒頭で宣言している。ハントによれば、「キーツの感情のすべては、詩的な媒体を通して現れるか、さもなければそれによりたちまち彩られるものであった」(*Ibid*, 283)という。先の詩論を展開させた章で「感じることの方が、もし

多少意識的思考が足りない場合でも、はるかに優れた詩になる可能性がある。ここでいう、感じるとは、思案する過程を踏まないある種の思考の状態のことである」とし、感情を詩人に必要な要素としていたが、キーツを、感情というものが詩の創作の原動力となっていた詩人として評価していたことが分かる。ただ、その後すぐ、詩人の欠点を一点挙げている。「キーツの初期の詩には実際あふれるばかりの若さが多分に見て取れる傾向にある、またその後になると、病によって研ぎ澄まされた彼の感情（‘sensibility’）は病的な過剰に向かっていった（‘Keats’s early poetry, indeed, partook plentifully of the exuberance of youth; and even in most of his later, his sensibility, sharpened by mortal illness, tended to a morbid excess’）」（*Ibid*, 283-84）ここで、病的な過剰（‘morbid excess’）という言葉に注目したい。ハントは、キーツの詩に見られる「過剰」について、折に触れて指摘している。‘I do not say that no “surfeit” is ever there; but I do, that *there is no end of the “nectared sweets.”* In what other English poet (however superior to him in other respects) are you so certain of never opening a page without lighting upon *the loveliest imagery and the most eloquent expressions?*’（*Hunt* 284）とあるように、ハントにとって、過度にあっていいものとは、「甘美なもの」（‘nectared sweets’）である。「美しい形象や雄弁な表現」は過剰であって何ら問題ない。それらは、詳細で具体的であればあるほど、読者を夢中にさせ、感動を与えるからだ。一方、避けるべき「過剰」とは感受性（‘emotion’）の過剰である。ハントは「聖アグネス祭前夜」は後期の詩の中で最も優れた詩としているが、‘The only speck of a fault in the whole poem [The Eve of St. Agnes] arises from an excess of emotion’（*Ibid*, 287）とし、この詩の唯一の欠点として、‘excess of emotion’を挙げている。また、‘The Eve of St. Agnes betrays morbidity only in one instance (noticed in the comment)’（*Ibid*, 284）とあるように、それは、‘morbidity’という言葉で置き換えられる。感情が過剰になった状態が‘morbidity’であるか、もしくは病的な心理状態ゆえに情動が過剰になったのか、いずれにせよハントは、両者をほぼ同義で使用していると考えていいだろう。感情の過剰さが目立ったキーツの後期作品の中で、「聖アグネス祭前夜」はその傾向が極端に少ない例外的な作品であるとし、この詩を称賛している。言い換えれば、それは‘morbidity’な心理状態、もしくは過剰な感情の表出というのは、「最も詩的な」詩に必要な要素ではないとハントが考えていたということに他ならない。ハントの考える詩に必要な要素とは、‘nectared sweets’である。ハントがこの「聖アグネス祭前夜」のコメントの中で、‘A thing of beauty is a joy forever’（*Endymion* I: 1）の一文を引用し、美の偉大な力について言及しているが、この一文こそがハント自身のあるべき理想の詩の姿を端的に表していたのだろう。

ここで、「聖アグネス祭前夜」の唯一の欠点とされる箇所として ‘the lover’s growing “faint” is one of the few inequalities which are to be found in the latter productions of this great but young and over-sensitive poet.’（*Ibid*, 306）と指摘している。これは、窓のそばで祈りを捧げているマデラインの美しさにポーフィロが気絶しそうになる場面である。ハントは、1820年の時点では、ポーフィロの気絶する記述に特に留意することはなく、この場面はむしろ、マデラインの美が最大限に描かれたところとして、引用し、賞賛しているだけであった。だが、ポーフィロの卒倒をハントは不適當であ

り、感じやすい詩人が、創作当時の自身の恋愛感情を登場人物に投影しすぎているとみている。この箇所が先に述べたハントの指摘する情動が過剰になった状態すなわち病的な心理状態が表れているところである。

そしてハントは、この卒倒するポーフィロに異議を唱えるだけでなく、ある種の冷静さをポーフィロに読み込もうとしているきらいがあることが彼のコメントからうかがえる。ハントは別の箇所でするように評している。‘*Madeline is half awake, and Porphyro reassures her with loving, kind looks, and an affectionate embrace.*’ (*Ibid*, 307) ここではポーフィロは夢から半ば冷めたマデラインを前にしているが、その様子はいたって、冷静沈着であり、彼女を安心させるために、抱擁するのである。己の感情の溢れるままに任せるのではなく、愛しい人に厳しい現実を受け止めさせようと理性的に対応する男性の姿がある。したがって、ハントにとって、ポーフィロは、マデラインの伝説の夢を現実のものとし、屋敷から連れ出す使命を持っているのであるから、気絶などすることはあってはならないというのである。キーツの描いたポーフィロ像をハントがきわめて歪曲しているといえるだろう。

ポーフィロ像にハント独自の解釈が加わっているのは明らかだが、同様のことが、冒頭に登場する祈祷僧に関しても言える。祈祷僧が客間から響いてくる音楽に涙を流すのは、この世への未練を捨てきれずにいるからと捉えられるが、ハントはこの僧の涙を「自分にも他の者と同様に甘美な音によって、慰めが与えられており、天の神秘的な恩寵は自分のような哀れな年寄もなおざりにされることはなかったと感じた」(*Ibid*, 303) と述べている。また、ハントは罪びとのために嘆きの祈りを捧げる僧に読者は同情せざるを得ないが、「彼の凍てつく寒さの中での苦行もこれが最後であり、じきに天の輝く門に入ることを知れば気持ちは慰められる」(*Ibid*, 303) としている。

『想像力と空想』におけるハントのある種、楽観的な解釈は登場人物だけではなく、この詩の主題自体にも及んでいる。‘*Its subject is in every respect a happy one, and helps to “paint” this our bower (sic) of “poetry with delight.”*’ (*Ibid*, 285) という箇所では、ハントは「あらゆる点において、主題は幸福なものである」としているが、ここにもハントの私見が過度に入り込んでいるといえるだろう。そもそも、恋人二人の結末が幸福なものであるかははっきりと示されていない。むしろ、廊下に出た二人は暗闇に包まれ、屋敷の外で二人を待つのは、凍てつく冬の嵐のみである。また、ポーフィロを導いたアンジェラは苦痛に顔を歪めて死に、祈祷僧も冷たい灰の中死んでいく。読者の誰もが「あらゆる点において幸福な主題」を読み取るかははなはだ疑問である。実際、1820年のハントによる批評において、マデラインは ‘*a young beauty, who ... finds herself waked by him in the night, and in the hurry of the moment agrees to elope with him*’⁽⁹⁾ と説明されるだけで、あくまで駆け落ちすることに同意したことのみ触れられ、二人の駆け落ちの結末が幸福なものであったかについては一切言及されていない。

ハントはポーフィロとマデラインの恋の成就というこの詩の主題に関しても、非常に楽観的であったといえる。先の引用の ‘*its subject ... helps to “paint” this our bower (sic) of “poetry with delight.”*’ という箇所からは以下のことが読み取れるだろう。ハントにとって、*subject* すなわち主題は詩を喜

びで彩るための手段であり、副次的なものに過ぎない。主題はあくまで、その幸福な性質により、喜びで満たすという詩の目的に参与しなければならないのである。また、主題自体が、複雑怪奇である必要もないし、そこには‘morbidty’が介入する隙もない。むしろ、主題は単純明快であるべきで、読者が目の前の美に耽溺する妨げにならない程度のものでよいのであろう。詩に対するハントのこのような考えこそが、「あらゆる点において、主題は幸福なものである」と言い切る、ある種楽観的な態度を生んでいるのだろう。ハントが理想とする詩とは、感情が過剰になりすぎるのではなく、幸福な主題のもとで、美が与える喜びにあふれる詩のことである。

キーツにとっての詩と美

それでは、こうしたハントの詩に対する主張に対し、キーツの場合を考えていきたい。キーツの第一詩集の献辞の詩にあるように、彼にとって自身の詩で「なんじ [リー・ハント] のような人を喜ばせることができる」(‘To Leigh Hunt, Esq.’ 13-14) ことは喜びであった。だが、キーツは詩に対して、‘I am sometimes so very skeptical as to think poetry is a mere Jack-o-Lantern to whoever may chance to be struck with its brilliance.’ と 1818 年 3 月 13 日に友人のベンジャミン・ベイリに宛てた書簡の中で述べている。キーツは、非常に懐疑的な精神状態になったとき、詩が「たまたまその絢爛さにうたれるすべての人々を喜ばせる鬼火」に過ぎないと思うようになるのである。この非常に懐疑的な状態に陥った場合には、もちろん詩そのものに対しても懐疑心が高まっているといえるだろう。キーツにとって詩の目的が単に「たまたまその絢爛さにうたれるすべての人々を喜ばせる」ことだけに感じられるときというのは、詩自体に対する懐疑心が高まったときであって、本来の精神状態、言い換えれば、詩人として理想の詩とは何かと考える場合、「たまたまその絢爛さにうたれるすべての人々を喜ばせる」ことは詩の本来の目的では決してないのである。詩の使命を、美によって人を喜ばせることと考えるハントの主張とは、真っ向から対立しているといっても過言ではない。

さらに、キーツが、『エンディミオン』第一巻冒頭で示した「美しいものは永久に喜びである」という宣言は、あくまで『エンディミオン』第一巻創作時の思想に過ぎないと考えるのが適当だろう。そもそも、『エンディミオン』執筆の間に、美に関するキーツの思想は変化していった可能性が高い。

I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination —
 What the imagination seizes as Beauty must be truth — whether it existed before or not — *for I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential Beauty* — In a Word, you may know my favorite Speculation by my first Book and the little song I sent in my last — which is a representation from the fancy of the probable mode of operating in these Matters. (L i 184-85, italics mine)

1817 年 11 月のベイリに宛てたこの書簡では、「あらゆる熱情が荘厳な状態になれば、みな本質的

な美を創造する」と述べ、美を個別の美しいもの ‘a thing of beauty’ に制限するのではなく、「あらゆる熱情（‘all our Passions’）」にまでその範囲を広げている。この後、「一言でいえば君は第一巻とこの前のお手紙で書いた唄でもって私の大好きな思索がお分かりになるでしょう」とキーツは続けているが、ここで「この前のお手紙で書いた唄」である『エンディミオン』第四巻で登場する「悲しみの唄」について触れることで、あらゆる熱情の中にはインド娘が唄う「悲しみ」も当然含まれることを明確にしている。「熱情（‘Passions’）」というのは、意味としては、強烈な愛や欲求、憎悪や怒り、恐怖、悲しみ、喜び、希望などのすべてを表しうる言葉である。キーツは「聖アグネス祭前夜」の36連で、‘impassion’d’ という言葉を用いて、マデラインに対峙したポーフィロの様子を説明しているが、この ‘beyond a mortal man, Ethereal, flush’d’（‘The Eve of St. Agnes’ 316）という箇所は、まさに熱情が荘厳な状態にまで高まった瞬間にほかならない。

まさにこの箇所をハントは、前述したように解釈している。このハントの解釈こそが、キーツとの美に関する捉え方の違いを物語っている。ハントが、詩において、熱情を高ぶらせること、すなわち感情に過剰なまでに従うのをよしとしないことは先に説明した通りである。一方、キーツは書簡の引用からも明らかのように、熱情が荘厳な状態にまで高められるところにこそ、本質的な美を見出している。いわば、キーツの詩作にとって、過剰なまでの感情の高まりは美を生む可能性を持ったきわめて重要な要素の一つなのである。

1820年の批評の際に、‘The Eve of St. Agnes, which is rather a picture than a story, may be analysed in a few words’⁽¹⁰⁾と述べているように、ハントにとって「聖アグネス祭前夜」は物語というよりむしろ絵画そのものであった。1844年時点でも、‘paint’ という言葉を使用してこの作品を評している。また祈祷僧の吐く息を「古い香炉から立ち上る聖なる香煙」に例えた箇所は、凍てつく冬の雰囲気「画家がそう呼ぶように」「調和（‘keeping’）」させていると述べ（Hunt 301）、豪華に彩られた開き窓の側で、ひざまづくマデラインは、「この絵画の卓越した、類を見ない美しさを完成させている（‘completes the exceeding and unique beauty of this picture’）」と称賛し、この場面は「詩においてそれだけで永遠に独立して存在しうる絵画（‘one that will for ever stand by itself in poetry’）」であると述べる。（*Ibid*, 305）

ハントにとって、「聖アグネス祭前夜」は、完成された美しい絵画のごとき詩行で人々に喜びを与える、「最も詩的な」詩であった。一方、キーツは完成された絵画の持つ美に満足しない。

When I was last at Haydon’s I looked over a Book of Prints taken from the fresco of the Church at Milan the name of which I forget — in it are comprised Specimens of the first and second age of art in Italy — I do not think I ever had a greater treat out of Shakespeare — Full of romance and the most tender feeling — magnificence of draperies beyond any I ever saw not excepting Raphael’s — But Grotesque to a curious pitch — yet still making up a fine whole — even finer to me than more accomplish’d works — as there was left so much room for Imagination. (L ii 19)

ハントが完成された絵画の美しさを読者に堪能させることを詩の意義と考えるのに対し、キーツは読者の想像力を喚起するような美の提示を望むのである。キーツにとって、芸術作品を完成させるのは、芸術家ではなく、鑑賞者の想像力である。このことと関連して、1818年2月の書簡の中で示した詩の公理について確認したい。

In Poetry I have a few Axioms, and you will see how far I am from their Centre. 1st I think Poetry should surprise by a fine excess and not by Singularity — it should strike the Reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a Remembrance — 2nd Its touches of Beauty should never be half way thereby making the reader breathless, instead of content. (L i 238)

詩は‘Singularity’ではなく、‘a fine excess’により読者を驚かすべきとある。この‘a fine excess’は、ハントの言う‘nectared sweets’と一見、似ているが、似て非なるものである。ハントが美を提示する目的は読者に喜びと高揚を与えることにあったが、キーツの目的はそうではない。‘It should strike the reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a remembrance’と続けているように、読者があたかも自分自身の気高い思考であり、自身の記憶の一つと感じさせるような‘a fine excess’が詩には必要だと考えているのである。すなわち、詩とは、目の前の詩行が、あたかも読み手自身の頭からあふれ出した思考から成る言葉であるかのように圧倒し、また読み手自身の記憶であるかのように思わせるように「想像」させるべきものと考えている。詩において美を提示する目的は「満足させる」ことにあるのではない。息を飲むほどに圧倒し、読者に「想像」させるという詩の目的の一手段として美は存在しているのである。つまり、キーツが詩を通じて読者に与えたいのは、喜びや満足感だけではなく、読者が詩人の体験なのか自分自身のものなのか、その境界が判別できなくなるほどの‘a fine excess’、別の言葉で言えば‘intensity’といえるだろう。ハントは‘nectared sweets’が象徴する、圧倒的な完成された美によって読者に感興を与えることを詩の意義としたが、キーツの提示する詩行は詩人の手によって完成された感情（それが喜びであっても）を押し付けることはしない。まさに詩人の *Negative Capability* を説くキーツが理想とする詩の公理といえるだろう。

結 び

そもそも、キーツはハントの唱えるような「幸福な主題」を求める詩人ではない。第一詩集の「睡眠と詩」(‘Sleep and Poetry’)ですでに語っているように、彼の詩が目指す主題は「より高貴な生」であり、そこでは「人間の苦悶と諍い」を避けて通ることはできない。また、1817年11月のベイリに宛てた書簡の中で、‘I scarcely remember counting upon any Happiness — I look not for it if it be not in the present hour — nothing startles me beyond the Moment. / The setting sun will always set me to rights — or if a Sparrow come before my Window I take part in its existence and pick about the Gravel.’ (L i 186) と述べているが、この時点ですでにキーツが、ハントの唱えるような幸福を、それは恋人

の幸せな結末であれ、天に召された信仰の厚い祈祷僧のものであれ、いかなる世間の幸福もあてにしてはいないことが分かる。仮に詩によって与えることのできる幸福があるとしても、それは一瞬のものに過ぎない。しかし、その一瞬は詩という形で人々の目に触れることにより、彼らの「記憶（'Remembrance'）」の中で永遠となるのである。それは、ナイチンゲールのオードで、昔の王も百姓も、ルツも聞いたナイチンゲールの声を詩人が耳にし、オードを読んだ読者もまたナイチンゲールの声を聞くようにである。読者が自らの想像力によって自己の経験と重ね合わせ、自らの記憶として詩行を内に取り込めるような、そうした激しい熱情の一瞬、そしてそれによって生み出される美の創造をキーツは求めていたのである。「聖アグネス祭前夜」が、想像力を喚起する美と、記憶にとどめ置かずにはいられない凝縮された熱情とで満ち溢れた詩の一つであることは間違いない。こうした二人の詩人の詩に対する根本的な考えの違いが、ハントによる「聖アグネス祭前夜」の解釈から改めて読み取ることができた。

注・キーツの詩の引用は、Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats*. (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard UP, 1978) に拠る。

・書簡の引用は、Hyder E Rollins, ed., *The Letters of John Keats: 1814-21*. 2vols. (Cambridge, MA: Harvard UP, 1958) に拠る。vol.1 は Li と略し、頁数を付す。

- (1) 正式名を *The Literary Pocket-Book; or, Companion for the Lover of Nature and Art* とする *The Literary Pocket-Book* は、1819年から1822年の間、年に一回ずつ刊行され、本屋や書籍商で販売された。London だけでなく、Oxford や Cambridge, Edinburgh といった町でも目にすることが出来たこの年鑑の目的は、'cultivate the middle-class taste for literature in an accessible and democratic form' であった。また、売り上げも非常に良く、5 シリングという値段は、*London Magazine* や、*Blackwood's Edinburgh Magazine* でも推薦されるほどであった。この年鑑に掲載された「自然の暦」('Calendar of Nature') は、非常に人気を博したため、二年後には、*The Months: Descriptive of the Successive Beauties of the Year* という一冊の書籍の形で出版となる。
- (2) Holden, 272.
- (3) *Ibid.*, 272-73.
- (4) Roe, 325.
- (5) Hunt, Preface iii.
- (6) Hunt, 1.
- (7) なお、「詩は自然と因習の間に位置し」という箇所に関し、フレミング・オルセン (Flemming Olsen) は 'On the linguistic level, the first member of the pair refers to what the poet's mind is grappling with when it is at the stage of gestation. The second points to the conventional, i.e. ordinary and non-poetical, use of language' とし、ここから、ハントにとって、詩の言語は散文のそれとは明確に区別されるべきものであると述べる。しかし、オルセンは同時に 'On the intellectual or spiritual level. Poetry is held by Hunt to stand between the way we usually perceive things (convention), and what they are really like (nature). Thus poetry is instrumental in bringing about a better understanding of the sublunary world as well as what lies beyond or above it' (34) と述べている。
- (8) Hunt, 2. 以下、頁数を本文中の括弧内に記す。
- (9) *The Indicator*, XLIII, August 2nd, 1820, 343.
- (10) *Ibid.*, 343.

Works Cited

- Hunt, Leigh, *Imagination and Fancy: or, Selections from the English Poets*. London: Smith, Elder & Company, 1891.
Google e-Books. Web. 5 Mar. 2013.
- Holden, Anthony, *The Wit in the Dungeon: The Life of Leigh Hunt*. London: Little, Brown, 2006. Print.
- Olsen, Flemming, *Leigh Hunt and What is Poetry? : Romanticism and the Purpose of Poetry*. Portland: Sussex Academic Press, 2011. Print.
- Roe, Nicholas, *Fiery Heart: The First Life of Leigh Hunt*. London: Pimlico, 2005. Print.